

(書評)

河野亜希子著 『「書く」ための文法指導に関する研究 形式名詞「こと」の取り扱いの観点から』(風間書房 2021年10月)

徳 永 光 展

言語教育における文法指導はいかにあるべきか。文法指導とはいっても、母語教育における指導と外国語教育における指導では違いがあるが、その接続の可能性を模索する試みは志向されてしかるべきではないか。本書は、中学校、及び高等学校における国語科教育現場で実践を積み、現在は大学で外国人留学生に対する日本語教育に従事している著者が国語科教育と日本語教育双方の側面での知見を基にして取り組んだものである。国語科教育における文法指導は古文や漢文を読解するために不可欠という理由で古典文法に重きが置かれ、現代文法の指導は古典文法指導の導入として取り組まれる場合も多い。現代文の理解や表現に資する文法の学習がなかなかイメージしにくい状況も限られた授業時数で指導を完結させなければならない中学校や高等学校には存在している。一方、日本語教育の分野でも、話すことや聞くことといった音声コミュニケーションが性急に求められ、じっくり腰を据えて文法指導に取り組む余裕のない場合も観察される。けれども、言語の構造に迫る文法を体得する意義は言語学習において欠かせない。では、一体どのようなアプローチがこれまで模索され、今後志向されるべきなのだろうか。

そのような疑問から執筆された本書は、国語科教育や日本語教育の現場における文法指導の在り方を形式名詞「こと」の取り扱いの観点に特に焦点を当てて分析しており、「序章 はじめに」(1-20頁)、「終章 おわりに」(187-196頁)、「文献目録」(197-210頁)、「付録資料」(211-223頁)、「あとがき」(225-227頁)、「索引」(229-233頁)の他、8章から成っている。構成は図1(16頁)で明快に示されている通りで、序章と第1章で研究の背景及び研究の視点と先行研究概観を述べた上で、本

論1に相当する第2章から第4章では教科書分析及び形式名詞「こと」の分析、本論2に相当する第5章から第7章では形式名詞の効果的な指導法と学校文法の可能性が議論される。続いて、補論の役割を果たす補章では国語科教育と日本語教育の連携が模索され、結論となる結章でまとめと課題及び今後の展望が示されている。

「第1章 文法教育の変遷と先行研究概観及び研究課題」(21-54頁)では、明治期からの学校教育における文法教育を総括した上で、学校文法における形式名詞「こと」の取り扱いの現状と問題点を文科省検定済教科書と生徒の書き言葉に発見し、そこから形式名詞の効果的指導法と文法指導に必要な視点や可能性を議論する(49頁)という本書の方向性が明らかにされる。「第2章 文法に対する意識調査及び教科書・コーパスにおける調査結果」(55-78頁)では、中学生、高校生、並びに中高国語科教員にアンケートを実施した結果が示され、続いて中学校の国語科教科書や文法教材、並びに『書き言葉コーパス』における「こと」の出現状況について概観されている。「第3章 形式名詞「こと」の分類法と問題点」(79-99頁)では、辞典や先行研究を概観した上で、学校文法にあっては「文の成分における「こと」の位置づけと品詞としての「こと」の繋がりについて教科書では提示されていない」(98頁)状況が発見されている。「第4章 作文調査による形式名詞「こと」の用法分析」(101-135頁)では、中学校と高等学校における課題作文をサンプルとしながら「こと」の使用状況を概観し、誤用分析の状況を把握している。「第5章 学校文法における形式名詞の取り扱いの再検討」(137-150頁)では、「①品詞分類の意義・目的の徹底、②各品詞の「文の成分」における用法の提示、③文脈・場面における用法の提示を取り入れることを提案したい」(148頁)としている。「第6章 形式名詞の効果

 受付2022年11月21日

的な指導法」(151-160頁)では、「①文の成分(主部・述部等), ②品詞の概念, ③各品詞の働き」という従来の文法指導の流れ(図11, 154頁)に「④文の成分と品詞との関わり, ⑤抽象名詞主題文の特徴, ⑥容認度が異なる文の特徴, ⑦誤文訂正」(図12, 155頁)を追加すべきことが提案される。「第7章 学校文法に求められる視点とその可能性」(161-172頁)では, 文法指導に誤文訂正の項目まで盛り込み, 作文や論文の指導に発展させるべきこと(169頁), この延長線上に大学における日本語表現指導も考えるべきであること(170頁)が提案されている。最後に, 「補章 国語教育から日本語教育へ」(173-185頁)では, 国語科教育現場での知見に多くを依存する本書での議論が日本語教育においても「書く」指導を行う際に欠かせないこと, 言語教育の根底にあっては共有できる問題意識を有することを述べている。

本書は, 「現行の学校文法の問題点を, 形式名詞「こと」の分析から明らかにした点」, 「形式名詞「こと」の分析から, 学校文法全般に関する問題の一端を捉えた点」, 「学校文法の可能性に言及した点」(191-192頁)に特徴がある。この成果をステップとしつつ, 今後は外国人日本語学習者への具体的な指導法も考究されるべきであろう。著者が述べるように, 国語科教育の知見は外国語としての日本語指導の現場にあっても活かされるべきである。このことは, 何も「こと」の取り扱いに限るものではない。

日本語母語話者向けの文法指導は, 従来それ自体で完結されるように構築されてきた傾向は否めないが, 実践には相当な蓄積がある。外国語母語話者向けの指導に資するような書き換えが志向されれば研究成果は確実に有効活用されるであろう。また, 学習者の母語に応じた個別の指導方法が開発されれば学習者の負担軽減にもつながるが, これには対照言語学の知識が取り入れられるべきである。すると, 国語科教育と日本語教育のみならず, 外国語学との連携も模索されるべきであり, グローバルな言語教育活動が求められていくはずである。そのためには, 一言語のみの教育研究活動を脱して, 複言語的な視点を導入する教育へと飛び込んでいくことが求められるであろう。

本書での達成を発展させつつ, 国語から日本語へ, さらに比較言語へと著者の教育研究活動が

更なる拡がりをみせていくことを念願してやまない。